

OAG（オーランド・アーツ・ギャラリー）主催
2015.11.09(土) 14:00～17:00



(講演補助資料)

18:30～20:00
OAG ドイツ文化会館
4階ゼミナール・ルーム

講師：台東区生涯学習北斎研究会
島田賢太郎

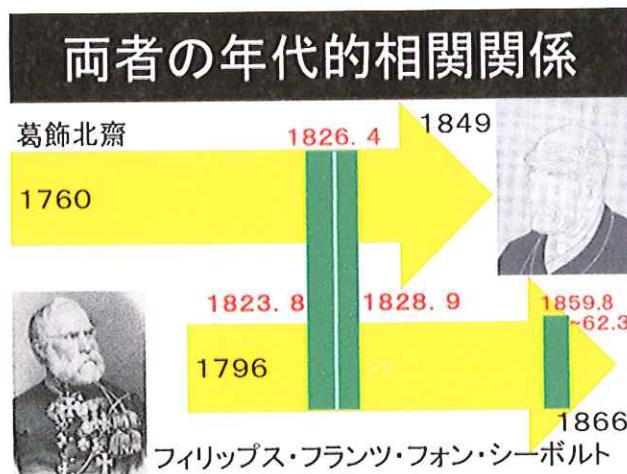
1 講義の概要

シーボルトが持ち帰った北斎画とする水彩画10図を中心に、それら作品の画風や筆致などを考察し、北斎の単独制作ではない左証に迫ります。そこには、北斎の娘であり門人でもある応為の特徴を3図に認めることができます。

2 演目と時間配分(90 分)

18 : 30	導入
: 40	①「北斎の生涯・葛飾派の概要」
19 : 00	②「シーボルトが持ち帰った北斎画」
: 15	③「応為の生涯・作品の筆致と特徴」
: 30	④「結言」
: 40	⑤「質疑応答・(まとめ)」
20 : 00	終了

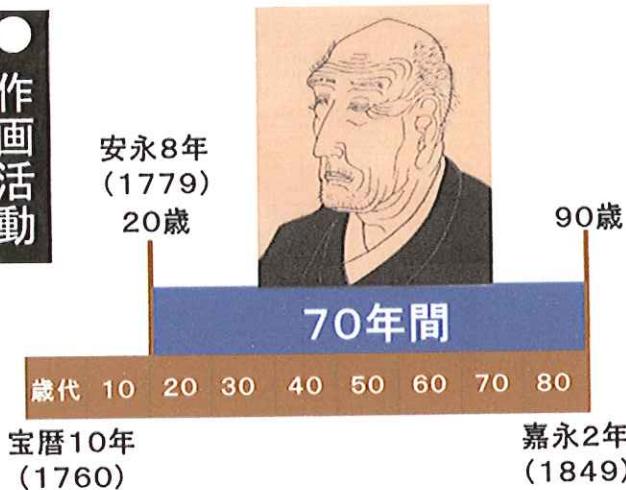
● 導入



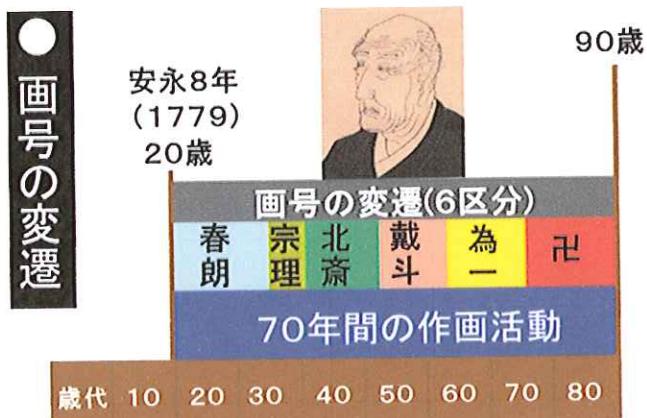
● ①「北斎の生涯と葛飾派の概要」



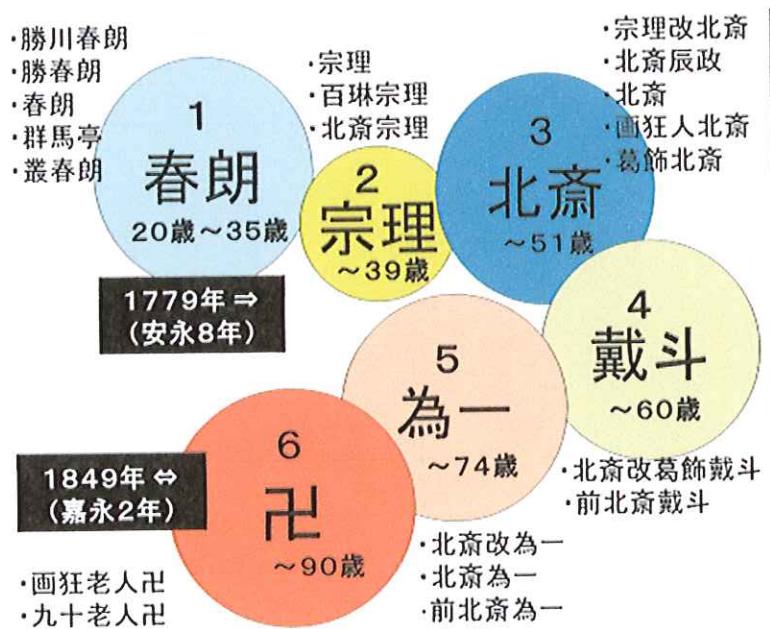
● 作画活動



● 画号の変遷



● 画業七十年間の主な画号変遷



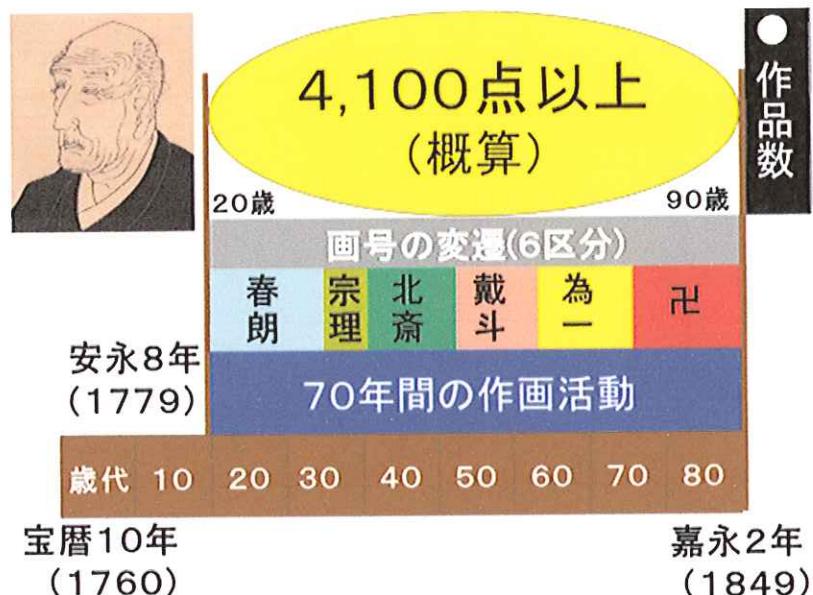
● 作画活動の変遷と特徴

1760 宝暦10年	1779 安永8年	1795 寛政7年	1799 寛政11年	1811 文化8年	1820 文政3年	1834 天保5年
幼少期 時太郎 鉄藏	春朗期 しゅんろう(15) そうり(4)	宗理期 ほくさい(12)	北斎期 ほくさい(11)	戴斗期 たいと(9)	為一期 いいら(14)	正一期 まんじ(16)
六歳の頃から物の形状を 写す癖ありといふ ※版本富嶽百景の跋文に記述	勝川門下の役者絵師として 活動するも、様々なジャンルに挑戦する	勝川派を離れ、摺物と肉筆画に傾倒	前半摺物と狂歌本に活躍 後半は読本挿絵と肉筆画に傾倒	（錦絵版画は殆ど無い） 絵手本類の版本が中心に活躍	後半は錦絵版画に傾倒 前半は摺物と肉筆画に傾倒	後半特に八十歳過ぎてから肉筆画に傾倒 前半は錦絵版画にも制作意欲あり

● 『富嶽百景』初編の跋文

己六才より物の形状を写す癖ありて
半百の此より数々画図を頤すといへども
七十年前描く所は實に取に足ものなし
七十三才にして稍禽獸虫魚の骨格
草木の出生を悟し得たり
故に八十才にしては益々進ミ
九十才にして猶其奥意を極め
一百歳にして正に神妙ならん歟
百有十歳にしては一点一格にして生ける
がごとくならん願くは長寿の君子
予が言の妄ならざるを見たまふべし

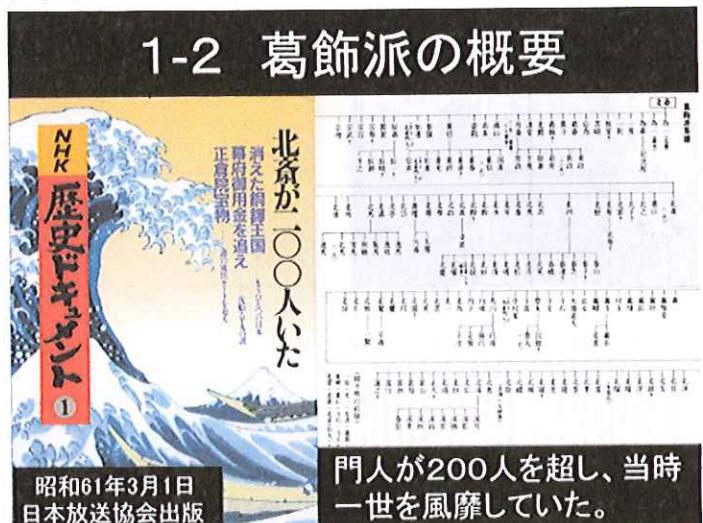




● 最期の言葉

明治 26 年に刊行された飯島虚心著『葛飾北斎伝』に、
「翁死に臨み、大息し、天我をして十年の命を長ふせしめハといい、暫く
して、更に謂て曰く、天我をして五年の命を保たしめハ、真正の画工とな
るを得へしと言吃りて死す。實に 4 月 18 日なり、歳九十」と記されてい
ます。

● ①・2 「葛飾派の概要」



この図は、北斎はじめ6人の門人達が一堂に会して
弁財天、布袋、毘沙門天、大黒天、恵比寿、福禄寿、寿老人
が描かれています。如何に門人達の画風が北斎の筆致に
似ているかが分かる格好の例になる肉筆画です。やはり、
“似て非なり”なのです。
(2011年2月台東区生涯学習講座資料から掲載)

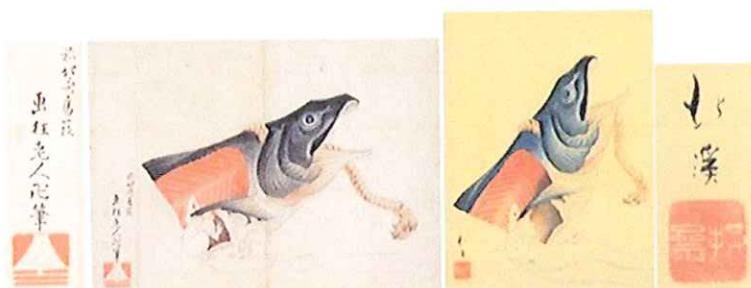


● 北斎門人・葛飾派の特徴 = 徹底した粉本主義の「没個性」

歌川派ならば、豊国門下に国貞・国芳、豊広門下に広重と、それぞれ個性的な絵師が輩出され、国貞ならば役者絵、国芳ならば武者絵、広重ならば風景画と、それぞれ得意とする分野に個性を發揮したと言えます。しかし、北斎の門人・葛飾派には歌川派のような個性が見られません。

(以下の図版：2011年2月台東区生涯学習講座資料から掲載)

粉本的作例①『塩鮓と鼠』



『肉筆画帖』10枚の1 紙本着色
25.0cm×33.4cm 小布施北斎館蔵

一九九三年一月 東武美術館
「大北斎展図録」から掲載

同左『鮓と鼠』
津和野葛飾北斎美術館蔵

一九九〇年三月 集英社
「北斎美術館第1巻花鳥画」から掲載

粉本的作例 ② 『美人夏姿図』



粉本的作例 ③ 『美人夏姿図』



粉本的作例 ④ 『大原女図』



粉本的作例 ⑤『月下竹林の虎図』



- ここでの「没個性」ある意味では、現代的な表現です。

それは「個性の表出こそ芸術である」という視点もあり、特定の画家のみが取上げられ、他の追随する画家の個性が埋没している、という視点によるところは否定しません。いったん「北斎」という大きな個性が出来ると、周囲はそれに追随することが正しく、北斎の路線を外れることは、政治に置き換えれば離党です。

葛飾派は葛飾派の画法を、北斎という強大な個性を尊重し、遵守することで、いわば「派閥としての命脈」を保ったと言えるでしょう。制作面からすれば、極端な譬えですが、新聞雑誌にしても、実際は誰が執筆したものか分からぬけれども、一つの書物・紙面として出来上がっています。葛飾派には、そのような要素が多く、画派を現代の企業活動のように考える必要もあるでしょう。あまりにも現代的な解釈、すなわち「芸術=個性尊重」を与え過ぎますと、江戸時代から離れてしまう感もあります。

一つの個性による派閥が出来ると、その個性により、企業活動的に絵画制作がなされ、一種の「北斎ブランド」が出来上がっていった、と言って良いと思います。しかしその反面、北斎という「偉大なる個性」が亡くなると、派閥の勢いは失速し、門人の業績は目立たなくなつたのであります。

歌川派の場合も時代とともに失速しますが、明治時代になってからも国芳門下では河鍋暁斎（1831-1889）（本流は狩野派）や月岡芳年（1839-1892）が活躍し、芳年の門下に水野年方（1866-1908）があり、さらに年方の門下には鏑木清方（1878-1972）ありと連綿と昭和時代まで続いたのであります。

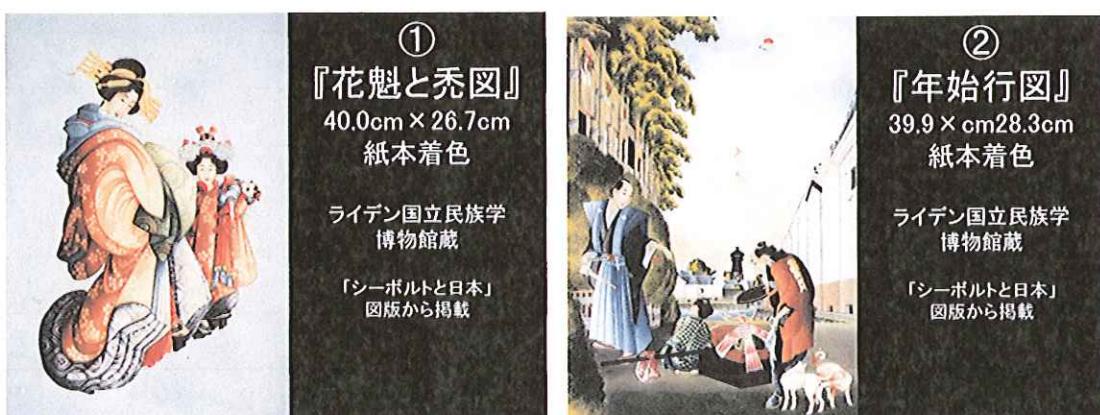
● ② 「シーボルトが持ち帰った北斎画」

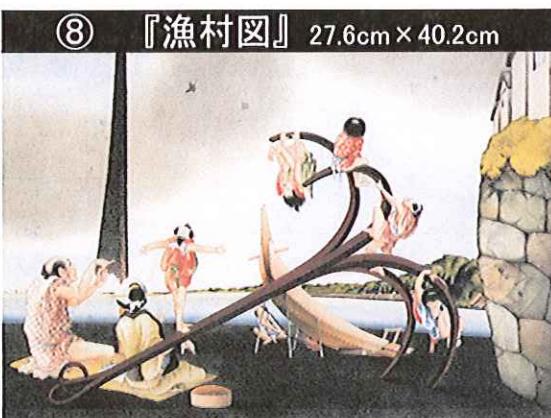
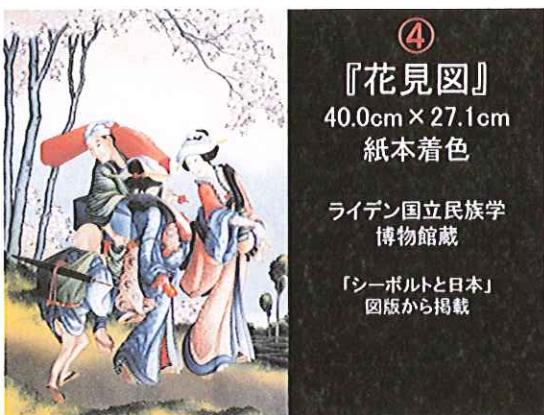


(以下の図版10図は、「シーボルトと日本」から掲載)

日本・オランダ
修好380年記念
『シーボルトと日本』
1988年3月
編集:京都国立博物館
:東京国立博物館
:朝日新聞社
発行:朝日新聞社
写真協力:小学館
表紙
川原慶賀「長崎湾図」
図版:158図
「日本風俗図」10枚
葛飾北斎筆

ライデン国立
民俗学博物館蔵

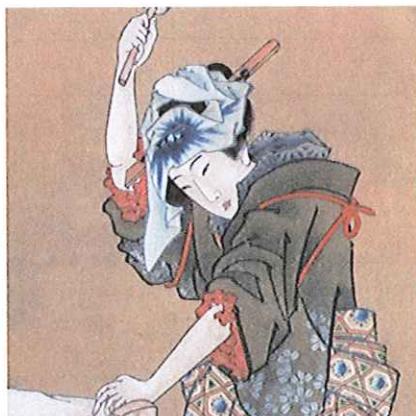


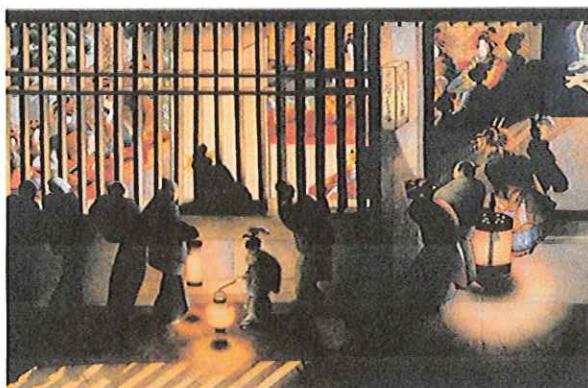


● ③「応為の生涯・作品の筆致と特徴」

- 北斎の娘(第三女)ということは分かっているが、生没年は判明していない。
- 唯一、『葛飾北斎伝』に、「一説に、阿栄、加瀬氏の家を出でゝ、加州金沢に赴きて死す。年六十七。」と、没年齢が記録されている。
- 『浮世絵類考』と『葛飾北斎伝』によれば、「南沢等明と言う絵師に嫁いだけれども、仲睦(むつ)まじからずして離縁、家に戻って再嫁せず、父(北斎)に従って絵を描いた」と伝えられ、さらに『葛飾北斎伝』では、「応為と号し、父の業を助く。最美人画に長じ、筆意或は父に優れる所あり。」と、記されている。その割には、不思議と応為の作品が少ない。
- 飯島虚心の別書『浮世絵師便覧』(同年同月刊行)では、応為の作画期を「天保、慶応」と記録しているので、最下限は、明治直前の慶応年間(1867年)までとして、この最下限に、『葛飾北斎伝』の「(没年齢)67歳」と合せると、1867年に67歳で没したとの仮定で、寛政末(~1801年)の出生になるか。

・応為の作品



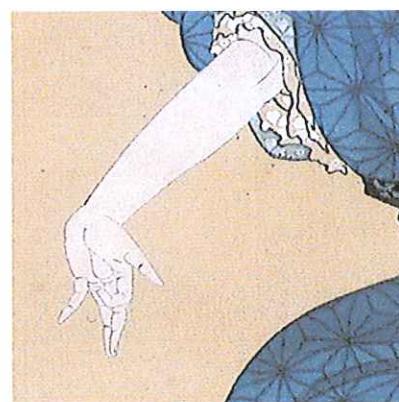
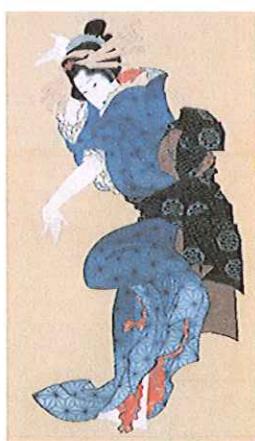


・ 筆致の鑑定法

ジョヴァンニ・モレッリ（1816 - 1891）は、イタリアの美術史上、作品鑑定の技術に科学的方法を導入した研究者として知られる。そのモレッリ式鑑定法の中に、「絵画作品においてはそこに描かれた人物の耳や指先といった小さく目立たない部分にこそ画家の特徴・癖が現れる」と述べる。こうした取るに足りない部分では芸術家が時代の様式を強要されることなく、個人的な癖に任せて無意識に描くことになる。そのため、たとえば筆跡と同じように、画家自らも意識しない個人の特徴が明白に現れる。（ウィキペディアから引用）

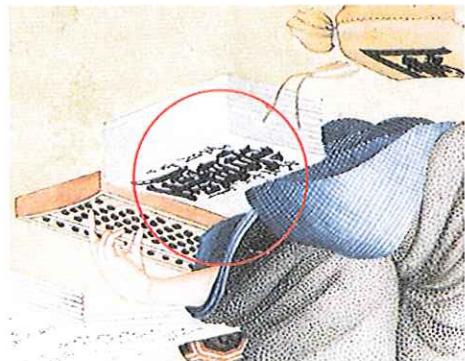
・ 応為の特徴

モレッリ式鑑定法を考慮しながら応為の作品を鑑賞すると、手のひらは筋まで細かく描かれているばかりでなく、指の間接部分まで描かれ、しかも指は指の根から先にかけて、次第に細くなっている。指先や間接部分までわざと細く描こうとしたというよりは、無意識のうちに、このような手・指先の表現になったと見られ、筆致の特徴（癖）の一つが出ていると考えられる。また、額（ひたい）に向かって右側に、二つ束になった髪の毛が出ているのも同じ特徴（癖）と見られる。



● 「結言」

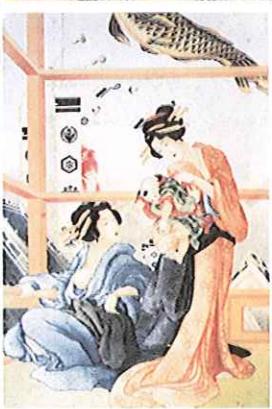
シーポルトが持ち帰った風俗画15枚の制作年代を、文政七年（1824）頃とし、以下三枚の風俗画は、応為が描いた作品と思料する。



④
『花見図』



⑤
『端午節句図』

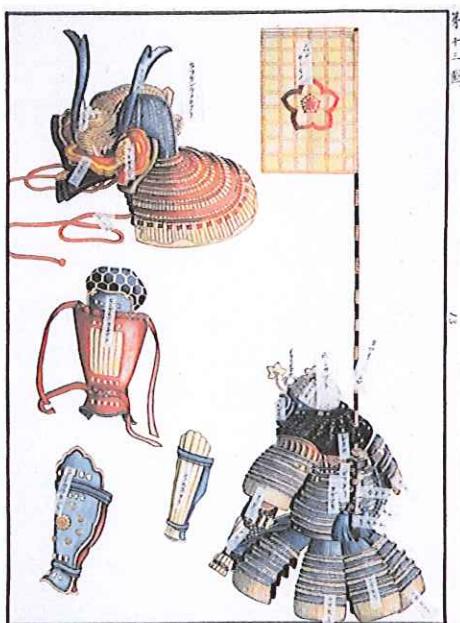


⑩『商家図』



OAG シーボルト・ゼミナール
2015.11.09 「シーボルトと北斎」

OAG シーボルト・ゼミナール
「シーボルトと北斎」



『武器・武具図帖』
ライデン国立民族学博物館蔵